

# 保育と生活の関連とは

— 子どもを核に置く園と家庭との連携と子育て支援 —

白梅学園大学大学院

研究科長

無藤 隆

本稿では、保育・幼児教育と家庭・地域との関連を検討する基礎作業として、保育における生活とはということとを整理しておきたい。園と保護者の協同・連携関係は何より子どもの最善の利益をめぐってということが中心になるが、そうしていく中で家庭と地域と園の保育の重なり合いと分担とを検討しておく必要がある。その上で、園と家庭・地域で暮らす保護者との関係を取り扱うこととしたい。

## 幼児における生活という考え方

保育・幼児教育（以下、特に保育と幼児教育を区別し

ない）をとらえるときに、そこでの「生活」とは何かが決定的に必要なこととなる。日本において、倉橋惣三がその点を明瞭に述べ、現在に引き継がれているわけであるが、そこで言うところの生活が、保育所に持ってきたときにいつもなじみが悪い感じがするのである。倉橋の言う生活は幼稚園を念頭に置いていて、あえて言えば中流的というべきなのではないか。そこで言っている生活というのは遊びと一体とされているのだが、そういうものと、保育指針を見ても生活という言葉が繰り返し出てくるのだが、そこで言っている生活はもっとリアルな衣食住であり、家庭と連続的な生活の面がかなり強い。つ

まり、生活習慣というようなときの生活であろう。そういう衣食住としての生活というのがあって、その上に遊びとしての生活というのが見える。その二つの面は幼稚園にももちろんあるのだから、つまりは保育全般において、二つの面があるのではない。

そうすると、かなり単純化すれば、保育所でも幼稚園でも理念的に生活を基にした保育といったことを言うのであるけれども、そこでイメージされているものと実際の幼保の中の生活のあり方はいささかずれるところがあるのではないか。保育所の場合には、歴史的に言っても、例えば生活できないとか、食べるものに困るとか、そういった家庭の事情を強く意識していたと思われる。例えば昼食にしても、保育所における給食は1日の栄養補給において重要な位置を持っているのであるが、それは3食のうちの1つというよりは、おやつとかを含めてもっと重いものともなる。もしかしたら朝ちゃんと食べていないかもしれないとか、夕ご飯がいがかげんな食事かもしれないということまで念頭に置きながらきちっとした食事を用意するとか、また食習慣を形成していくということを考えているのであろう。幼稚園の場合には、基本的には家庭できちっと食事を与えているのだから、昼は子どもが楽しく食べられる範囲で食べればよいのではないかという発想が強い。もちろん、今は食育という考えが入ってきたのでまた変化してきている。幼稚園で

も現在は生活の連続性を元にその保育を考え直すようにしている。

そう考えてみると、衣食住としての生活とは、家庭における生活の補いということと、園にいる時間が10時間とかもつと長ければ、普通の意味でそこに衣食住としての生活を営まざるを得ない。その上に幼児の遊びが成り立つ。そういう二重の意味合いで保育所の生活というのは成り立っていく。それに対して、幼稚園の場合にはもともとは遊びとして活動が展開されていくのだけれども、それをわざわざ生活と呼んでいるのは、おそらく子どもにとつての日常的なものであるとか、普段の環境からとか、そこで自発的、主体的なかかわりがあって、活動が成り立つことを重視しているのであろう。子どもたち自身がその生活をつくり出していく、生活の主体になっているのだととらえられる。そのときにイメージされているのは、別に子どもが、例えば昼ご飯を自分たちで作らなくてはいけないといったことを言っているわけではない。園にいる時間帯に子どもは遊んでいるのだが、その遊びというものを保育者が全部与えてしまうのではなくて、子どもが周りのものに出会って、そこからいろいろな活動を自分たちでつくっていく。その過程が楽しいがゆえに遊びと呼ばれるのである。

保育所が典型的には保育に欠ける子どもを預かるというつも、保護者が昼間は働いていて家にいないというだ

けではなくて、一部の家庭ではその衣食住のあり方がいろいろな意味で十分でないところがあり、それを園で補うという面も担っている。福祉という考えはもとともそういうものである。要するに、子どもが普通に生活を営んでいるときに、子どもにとって必要なものが十分に保障されないから、それを補うというのが福祉の考え方である。それに対して幼稚園というのは、そういうものはおも家庭で満ち足りているので、子どもの主体性を引き出すために、数時間という時間と幼稚園という家庭と異なる空間に子どもを置いて、子ども自身がその遊びをつくり出し、生活をつくり出すようにしていくのだということ強調してきた。だから、生活というものが幼児の間で異なるものとしてイメージされていたのであろう。

しかし、近年、保育所・幼稚園の歴史の中で、二つが近づいてきている。実際には、そもそも上記の理屈ほどすっきり分かれているわけではなかったのであろう。最近の食育という考えはまさに重なる例である。保育所において給食という活動・場面は、保育活動において重要なものである。それはまさに衣食住の中心だからだし、保育所でこそそれをしつかり指導し援助することが福祉としての営みとして大事になる。またその充実が他の活動をその底から活性化するようにもなる。それに対して、もととも幼稚園では、家庭から弁当を持ってくることが基本となっていた。お弁当の時間はみんな楽しんで時間を

であって、それ以上の問題があまりあるとは見なされないなかつただろう。そこで食事のしつけを頑張つてやろうとか、その他指導しようという発想は少なかつたと思う。食育という考えの中で、給食ではなくて弁当であっても、何らかの教育的意味を入れていこうと転換してきている。つまり、メインの教育活動ではないけれども、教育的な意味を見いだしていくことになる。(とはいえ、そこで子どもの主体としての遊びが成り立つと言えるのかどうかは難しいことではあるが。それはまた別の機会に取り上げるべき課題としたい。)ここで確認したのは、幼保ともに、衣食住としての生活と、その生活からいわば派生する遊びや教育という課題が成り立つ生活との二重の意味が成り立つということである。

### 地域の暮らしとの関連

さてそこで、生活という部分にもう1つの問題を入れたい。幼稚園なり保育所なりがあると、それらを含み、家庭を含むところで地域の生活というものが成り立っている。これとの関連である。これを「暮らし」と便宜上呼んで呼んでおきたい。例えば、季節のいろいろな行事を園ではよく行う。これはもともとは家庭を含めた地域の暮らしの中でやっているものを、園で採り入れていたのであろう。お正月が近ければ正月の行事とか、花見であるとか、七夕であるとか、いろいろなものをその

ままでないにしても、園の活動としている。園と家庭や地域と特に衣食住のレベルでつながるといことは既に述べたが、暮らしというときにはもう少し広い文化レベルで、地域の文化につながっていくものではないか。例えば園では、行事をしたり、活動としては例えばおやつをみんなで作るとか、あるいは編み物をするとか、要するに家庭や地域でやっていそうな活動を園でやることなども、近いところがある。

そういうのは、地域で暮らしているところにあるものを園の中の活動に採り入れていくわけである。園にはそうではないものも多くある。例えば砂場とか積み木も、特に大型積み木などは園にしかないだろう。砂場や滑り台は公園に行けばなくないけれども、大体は園でやっているだけである。そういう種類の活動とともに、地域や家庭でやっているもの、またかつてはそうであったものを採り入れて園でやっている場合がある。畑の栽培などもそうだろう。そういった暮らしを採り入れていくというのは、もともとは園での活動というものと地域の暮らしというもののつながりを付けるという意味があったのだと思う。

つまり、一方で、園でこそできる活動というのがたくさんある。子ども集団として遊び回るし、積み木なり砂場なり滑り台なり、園でこそある特別な遊具もある。地域になくもないけれども、主には園にあるものは、幼児

期にふさわしいものとして機能性が高いと思われる。しかし同時に、それだけではなくて、地域でやっているようなものをいろいろなかたちで採り入れる面があるのである。それは今述べたように、園独自のやり方だけではいけなくて、地域でやっているようなことも採り入れて、連続性を図ろうということだろう。

これはもちろん、特に保育所において重要なことである。子どもたちはより長く保育所にいるわけだから、裏返して言えば地域・家庭での経験が少なくなる。そこで、地域や家庭で経験するであろうことを園で経験できるようにしないと、経験し損なってしまう。けれども、それだけの問題ではない。例えば、園の保育を見ていると、この十数年で飼育・栽培とか、調理とか、そういった種類の家庭でやりそうなことを園で行うことが増えてきたという感じがしている。多分、保育者の意識としては、家庭や地域でやるべきことなのだけれども、実際にはやらなくなっているのだ、園でやらなくてはいけないのではないかということではないだろうか。食育などもそういう面もあるのだろう。幼稚園など特に、お弁当の時間を保育の活動として充実させるといのは、あまり従来はやっていなかったと思う。でも、それをしないと家庭でやらなくなってきたので、まずいのではないかと思うようになってきている。はしの持ち方なども指導した方がよいのかと考えるようになってきている。

先ほどの生活というのは2水準あって、衣食住のレベルと遊びのレベルを挙げた。遊びと呼んでいるときには、だいたい園に固有のさまざまな遊具を使うことを主にしている。子どもにとって普段家庭で遊んでいるものをそのまま使って遊ぶということではないのである。そこは園の独自性が強いことになる。それに対して衣食住は当然ながら普段の生活とつながっていくわけだけれども、今それに加えて強調したいのは、そういうものの上のレベルとして暮らしのレベルでの文化的連続性を図る必要があるだろうということである。そのことによって、園で生活している子どもたちの経験があまりに園に独自のものになりすぎないで、普段の生活と結び付いていくのではないかということである。ところが普段の暮らしというものがどんどん変容してしまうので、逆に園の生活の中である種のあり得るべき地域の暮らしを再現していかなければいけないというのも、この十数年の顕著な特徴でもある。

そういう意味で、実は生活ということをとつにしたけれども、もう1つの次元として言えば、地域の暮らしとの関係の中で園の生活というものをどうとらえたらよいかということがある。

そういう観点から見ると行事なども新たな位置付けが可能となる。日本の暮らしがもとも季節感を大事にして、季節の節目に行事が各種おこなわれていたのである。

それが地域や家庭では消えていつている。それを園の中であえてやってみることによって、1年間という時間の流れの中の暮らしの節目を子どもたちに感じさせるという意味があるのであろう。例えば、七夕ということでは、東京で見る限り家庭ではあまりやっていないと思うので、もはや幼稚園や保育所や小学校で行うものとなっている（および商店街で行う商業的な催しとして行われる）。しかし、私の子どもたちは家で七夕をするのは珍しいことではなかった。笹飾りで簡単なものぐらいは家庭で置いていた。9月のお月見は地域によってはやっているのかもしれない。私の生家では、子どものころは必ず月見だんごを作って、仏壇と窓際に飾っていた。

そういうことを園でやるときに行事保育とすぐ悪口を言われるが、やはり意味がある。1年間というもの節目をつくっているわけである。それをうまく保育として展開できるならば、むしろ園の生活と、もっと広い意味での地域での文化との結び付きをつくり出す上で重要な働きを担い得るのではないかと思うのである。

### 環境に含め指導すべきこと

では、具体的にこういったものの活動をどう進めていくか。ひとつ考えなければいけないのは、子どもにとつての3歳から5歳の3年間、さらに小学校に行くわけだが、24時間の生活を考えたときに、園にいる間とそれ

外の家庭・地域にいる時間がある。それらの組み合わせの中で総体的に考えるべきことだと思ふ。

一つには、幼児期を中心とした数年間の幅で1日24時間、1年365日、この中の総体の経験の中で、ある程度経験すべきなのか否かという判断が働く。もう一つは、どの程度それぞれについて経験しなくてはいけないか。3番目は、「接する」とか「かかわる」、「知る」、「経験する」等、いろいろな言葉を使っているが、要するにその知り方である。幼児期において、どういう意味で知ることが成り立たなければならぬか。これが保育指導において決定的に重要になる。

ある程度は知ることが必要ではないかというような実証的な根拠があり得ると思う。もう一つは価値判断であり、絶対に知らないとな大人になって困るだろうというレベルのことと、単なる好みではないにしてもかなり価値判断が働き、当然ながら文化的、歴史的に相当違うだろうという幅がある。つまり家庭でいくらでも接しているのなら園での体験はあまり要らないかもしれないけれども、そのあたりは地域による事情がさまざまだから、それを含めて考えてみるわけである。

土に触れるということだって、不要だという考えもあると思う。しかし、都会に住んでいて、マンションに暮らしていると庭はなく、道は全部舗装されているわけで、普通の行動範囲では土を踏むということはない。そうい

うところでは、おそらく土を踏むというのは園ぐらいしかない。都会には土の公園も少しあるが、舗装されている公園も結構多いから、そのときに土を踏んだり砂に触れたりする経験は大事なことなのではないか。どの程度に体験活動を園に持ち込むか。どのくらい活動として重視して、子どもが分かるようにしていくかということとは、価値判断ではないかと思う。だから、あまり科学的根拠として明確なものはまだ得られていないのであるが、ただ私を含めて多くの人間が考えているのは、こういう小さい時期というものは、大人人間がどの社会でも経験しそうなことはやはり大事なのではないだろうか、という素朴だけれども欠かせない発想であると考えるのである。

### 園環境のあるものへのかかわり

園にあるものへかかわるといふことは、単に周りにあるというだけではなくて、積極的な活動としてそのものに関与しなければいけないはずである。そうすると、その活動が可能となかなかたちで、かかわるといふことが必要になるわけである。

ではそれは実際の保育の中で可能になっているのだろうか。事実として周りにあるということと、子どもがそれを活動的に体験できているかというのは別なことなのである。雨については、ある園に行ったときに、その園の保育者が「うっかりすると、うちの子たちは雨が分か

らない」と言っていた。高層のマンションの下にあるのだけれども、屋根が付いていて駅に近い。ですからほとんどぬれないで来る。さらに、保育中は雨の日はほとんど外に出ていない。だから、雨の日に傘を差して歩くということがない。買い物もほとんど自動車で行っている。「だから、最近わざわざ雨の日に出すのです」ということであつた。

そういういろいろな経験を小さいときにするわけである。どの土地に生きていても経験するであろうようなことは一通り小さい時期にした方がよさそうだという方針が立つであろう。24時間全体、365日全体を考えたときに、子どもが経験したらよいことはある程度そうなるように工夫していく必要がある。

### 社会的な環境へのかかわり

保育にとつての社会的な環境についての検討はあまり進んでいないのだが、園の保育と家庭や地域との関連という意味では、特にその点が重要である。昔からあつて行われているのだけれども、どの程度行うべきかについての検討が十分でない。例えばよく園の行事を行う。七夕とか節分とかをどの園でもやっている。ああいう行事というのは子どもにとって活動が面白いというだけではなくて、先ほど述べたように本来は暮らしの一部であつて、地域の暮らしの中に子どもも参加するかたちでやっ

ていたわけである。特に日本の場合には季節の行事だから、季節感と共に行事がある。暮らしというときにはおそらく春夏秋冬の1年間というものがあつて、この中の変化の折り目に行事が営まれていた。

もう一つの問題は日常の生活の衣食住の部分である。例えば、料理という活動を入れるのかどうかを例に挙げられる。これも、小さいときに24時間、365日の中でどの程度子どもに経験させるべきなのかということの判断が難しいところである。小さい子どもに料理とか掃除といった衣食住にかかわることはどの程度やらせるべきなのか。これは、先ほど述べたように、幼稚園と保育所ではかなり発想が違ふと思う。保育所の場合には園にいる時間が長いので、家庭・地域をあてにできる度合いが低い。だから、基本的に保育所は衣食住の全部を園で経験させる必要がある。幼稚園の場合は専業主婦も多く、時間もあるかもしれない。そのときに、夕ご飯は無理でも、クッキーを一緒に作るとかできなくはないだろう。ただ、幼稚園の親にしてもだんだん家庭ですべてやることはなかなか難しい状況になり、仮に時間はあるにしても、昔と違って多くのものは電化されていく中で、あるいは商品化されていく中で、子どもが手伝いながら調理を一緒にやるというのは贅沢な趣味になってきている。子どもに手伝わせるというのは、今いろいろな機器がたくさんある中でかえって大変である。電子レンジのボタ

ンを押させるだけではつまらないので、子どもなりに面白いことをやらせなければいけない。

つまり子どものために特別に何かをやってやらないと手伝いというのはできないわけである。こう考えてみると、衣食住の基本的なことで幼児にできること自体が減ってきているし、普通の家庭の状況の中でそれを子どもに分担させることはなかなか難しい。そうすると、幼児に合わせて園でやらないと、おそらく経験しないということが結構ある。どの家でも、あるいはどの文化でも、人間として基本的にするようなことは幼児期にやった方がよいという考えで言えば、衣食住に伴う文化的活動の一通りはぐらいいは経験した方がよいかもしれない。

もう一つの事情があつて、それは、例えば簡単に縫うとか、編み物をするとか、そういうたぐいのもので「作る」という経験を一度はどこかでやった方がよいのではないかとということである。先ほどの料理の手作りも、別に手作りでホットケーキを作っても、料理体験としてはどうということはない。自分たちの力でクッキーなりホットケーキを作ることを、子どもが経験することに意義がある。子どもたちの日常生活がすべて与えられたものなのだけれども、そのうちの一部については自分たちで一度作ってみるといふ経験が大事なのではないか。

## 作り、働きかける

暮らしにかかわる問題、その中の人工的なものについては、自分で使うためではなくて、自分で作ってみるといふ経験が大事なのである。そうすると、お菓子を作るというのが、同時に食べ物を作るという経験である。それがこういったことの基本としてあるのではないか。そう考えてみると、どこかで使うあるいは接するということと、もう一つは作るという2つのやり方がある。使うというのは、例えばさまざまな料理を味わうということである。これは最近、食育というかたちでいろいろやっているが、1つか2つぐらいでよいので、試しに作ってみるといふことである。こういった暮らし全体を経験する側、享受する側とそれを提供する側の両方に立つことに意味がある。街の暮らしなどは、実際に街に出掛けて商店街で買い物するとか、いわば使う側になる。それを作り出す側には回れない。でも、ごっこ遊びの中で、お店屋さんごっこをすることで、自分たちで作って売るといふように、作る側に回る経験を多少出来るだろう。

そういう両方の面でいろいろな経験をするだろう。例えば、机だとか椅子だとか、あるいは時計といった機械製品でも、使うだけではなくて作ることもできる。ごく素朴なものでは、牛乳パックを合わせて椅子を作るとか、適当な木工でいすを作るぐらいは園でもできる。時計の



本物は作れないが、ごっこ遊びでは作れる。いろいろな機械を分解するというのでは、時計にしても昔のぜんまい式のものにはネジみたいなものがたくさん入っていて面白いので、やってみる価値がある。それは基本的に作る側に回ることである。そういう形で暮らしへの積極的能動的なかわりができることだろう。

そういう原理は行事でも同様である。園でやる行事というのは、さまざまなことを味わうとか経験するということなのだが、例えば節分のときに節分の行事を経験するとは、同時に鬼の面を作るとか、何々ごっこをするというかたちで作る側に回ることでもある。その組み合わせの中で行事を経験しているわけである。ただ、暮らしについて言うと、使うという経験部分をどのぐらい深めるかというのが難しいところがある。例えば七夕の行事で言えば、ササ飾りを作るぐらいは園でできるわけだが、夜空を見るという中でササ飾りを飾るとするのは夜でないときできないわけだから、これをどうするかというのは結構面倒だろう。そうすると家庭や地域に持っていったらちでやってもらうという手もあるし、5歳ぐらいで宿泊の保育をやるというのもあるし、いろいろな工夫が出てくるわけである。

### 生活の連続性から子育て支援の基本を構想する

幼稚園・保育所で行う子育て支援とは単に子育て中の

親が困っていることを助けるということではない。何より子どもという中核があり、その子どもが育つということとをめぐって、保護者と園が共有することが基盤である。子どもが無事に元気よく育っていく様子をともにすること、またその育つことへとともに力を出し、合わせていくことが、園における子育て支援を支えるものとなる。

だから、園での子育て支援とは各々が子どもに対して向いており、その向く働き掛けにおいて互いに連携する関係の中でともにすることなのである。それを通して、園の方は園の保育の生活基盤を豊かにし、家庭や地域の暮らしとのつながりを深めることが出来る。保護者の方は園において子どもが育つところを感じ取り、そこから自らの子育てに何か活かせることを見出していく。園での保育と家庭での養育と双方が力を得るような協働関係を園と保護者の間に構築するのである。そこでは、園と保護者との連携と保護者の園に対する子育て参加・参画と園による保護者への子育て支援が互いに重なり、相互に関連する。園の保育の手空きの時間に保護者の要望に応じて、家庭の子育ての手伝いが出来ればよいということではない。園の保育自体を豊かにすることと切り離せないものなのである。